

## 縄文時代の習俗



狩猟と食物採取を主体とした縄文時代。この時代には天候、気候、病など自然の脅威が数多くありました。縄文時代の人々は自然の脅威に対して祈る道具として、数多くの祭祀遺物さいし遺物を残しています。

槍・弓・石斧が食物生活に必要な「第1の道具」と呼ぶのに対して、食物生活を離れて祈りなどに使う道具は「第2の道具」と呼ばれています。残念ながら、この第2の道具は今の私たちに何も語ってはくれませんので、民俗資料などを手掛かりにその道具の使い方を想像するしかありません。

大型の石棒（薪遺跡）

ちに何も語ってはくれませんので、民俗資料な

などを手掛かりにその道具の使い方を想像するしかありません。

京田辺市たきぎ薪遺跡では、縄文時代後期前半の土器や石器が出土した流路から近畿地方で最大級となる大型石棒せきぼう1点が出土しました。この石棒は下半分が折れていますが、頭部の笠が2段に作られ、現存する長さは30.5cmを測ります。大きさや形態は、京都府綾部市の葛礼本神社に奉納され、今も脇社の御神体として奉られている全長104cmでほぼ完形品の石棒に類似しています。ムラの広場に石棒を立て、自然の恵みへの感謝と子孫の繁栄を祈念したマツリのシンボルだったと考えられています。

長岡京市ともおか友岡遺跡では、縄文時代後期の土器とともに石冠せっかんと呼ばれる石製品が見つかっています。この石冠については、木の柄に基底部を縛りつけて使う石斧のような道具かもしれません



用途がわからない石冠（友岡遺跡）

が、その用途についてはまだわかっていません。

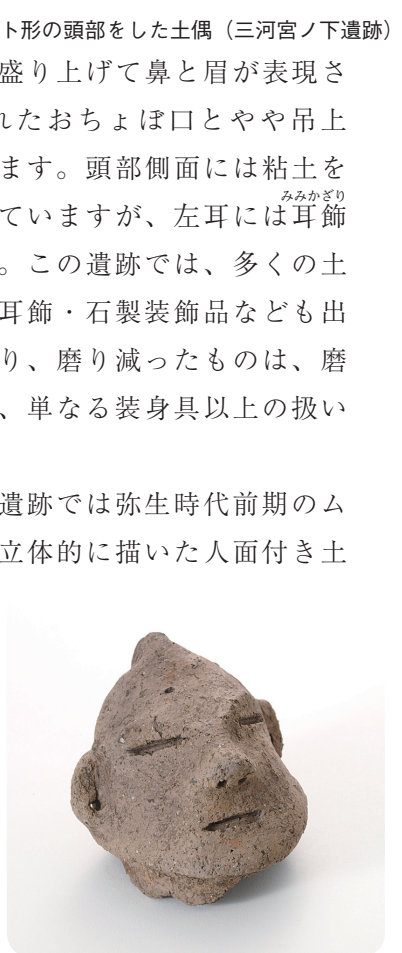
何らかの祈りや願いを込めた宗教的・呪術的なものだったと考えられている道具に土偶どぐうがあります。

福知山市三河宮そうごみやのしたノ下遺跡の土偶は、幅4.8cm、高さ3.2cm、厚さ2.3cm

でハート形の頭部をしています。こハート形の頭部をした土偶（三河宮ノ下遺跡）の土偶は、顔面に一続きの粘土を貼って盛り上げて鼻と眉が表現され、ヘラ状の工具による刺突で表現されたおちょぼ口とやや吊上がった目が、顔の可愛さを引き立てています。頭部側面には粘土を貼り付けた耳があります。右耳は失われていますが、左耳には耳飾みみかざりの痕跡と見られる刻みが施されています。この遺跡では、多くの土器に混じってメノウ・ヒスイで作られた耳飾・石製装飾品なども出土しています。石製の装飾品は破損したり、磨り減ったものは、磨きなおし、穴を開け直して使われており、単なる装身具以上の扱いをされていたようです。

土偶に似た遺物として、与謝野町温江あつえ遺跡では弥生時代前期のムラを囲む溝の中から、目・鼻・顎などを立体的に描いた人面付き土器が出土しました。頭頂部から後頭部にかけて鬘まげまたは鶏冠とさかのような表現があります。このような人の顔を土器に付けた人面付き土器は、本体である土器の部分がなく、容器のふた部分や口の部分など、どこに貼り付けていたものなのかはわかりません。なお、容器に人面を付けた土器が関東では納骨の容器として使われた例があります。

（竹原一彦）



人面付き土器（温江遺跡）